

陳述書の例です。

恐怖感——。これが、私が福島第一原発事故によって植え付けられ、心に被った最大の被害です。

地震が東北の大地を揺らすたび、福島第一原発の温度計がまた壊れたとの報道に接するたび、そして、原子炉や核燃料プールへの冷却水の注水が止まるたび、福島県の郡山市に暮らす私は、「これで人生の終わりかも」というほどの恐怖を感じています。

つとめて今までどおりの生活をするよう心がけてはいますが、絶望感と言い換えてもいいこの感覚は、昨年三月以降、原発事故によって日々の生活を翻弄され続けてきた私たち福島県民以外の方には、なかなか理解しづらいものかもしれません。でも、事故が起きる以前は一度も感じたことのない気持ちでした。

原発事故による放射能汚染で、家や仕事をなくしたわけでも病気になったわけでもありません。それでも、これほどの恐怖を感じるのです。だから、福島県から避難する人が今も後を絶たないのです。

被曝は、れっきとした傷害事件なのです。このことが明確に裁かれていないからこそ、加害企業の東京電力は、被害者に対する賠償を誠実に行なおうとしないのです。

原発事故以降、私はすべてのことに関心と責任を持つ生き方を目指すことにしました。告訴団の結成が、「集団無責任状態」から日本が脱するきっかけになればと願っています。

(Y. Hさん)

一七年前、東京から福島県都路（みやこじ）村（現在は田村市都路町）に移住した。阿武隈山系にある雑木林の中に家を建て、夢に描いてきた「田舎暮らし」が始まった。

秋の夕暮れ時、薪ストーブに火をいれる。「森のテレビジョン」と言われるその炎は美しく見飽きることなく、夫と二人並んで時が経つのも忘れて眺めた。そんな穏やかな平和な時はもう戻らない。薪が放射能で汚れてしまった今、焚くことはできなくなった。

川口由一さんの提唱する「耕さず、肥料さえも施さない」自然農のたんぼや畑は、私の天国だった。毎日新しい発見があり、そこにいるだけで楽しかった。

すべての生き物がいとおい存在だった。ともに生きているという喜びがあった。そこに種をまき、育った米、雑穀、豆、野菜たちは、それ以上にいとおいだった。我が子のように自慢できた。小さくても、少々形が悪くても、味は抜群だった。兄弟姉妹や友人たちに自信をもって贈ることができた。訪れてくれた友人たちへのもてなしは、山里でとれた幸で十分だった。でも、その喜びはもう戻ってこない。

それなのに、「年20ミリシーベルト以下の放射線量だから家に戻れ」という。山の中にいながら、山の恵みもいただかず、米や野菜もつくれず、薪ストーブも焚けない……。戻ってどんな生活をすればいいのだろうか。

避難した石川県金沢市での都会生活の中で、思いまどう日々が続いている。

(M. Aさん)

私は2000年に旧都路村(現田村市都路町)で竹炭製造業を営む夫と結婚しました。以降、事業を手伝う傍ら、自給用の米、野菜を作り、二女一男を育ててきました。過疎の山村でありましたが、人が住むことによって地域を守り、自然を守ることの大切さを感じ、誇りと責任を感じながら暮らしていました。

2006年には仕事場のある山中に大工さんと一緒に家を立て、村の中心部の借家から引っ越ししました。山の湧き水を引き、暖房、調理、風呂に薪を利用し、豊かな自然の恵みを受けて暮らすことに感謝しながら、子ども達、未来の世代にいつまでも持続可能な暮らしができる環境を残したいと思っており、ました。

ところが、2011年3月11日福島原発事故が起こり、私達が大切にしていた生活はすべて壊されてしまいました。避難解除となった今も放射能管理区域以上の空間放射線量で、周囲を山に囲まれた地域では除染の効果も期待できず、とても子どもを帰せる環境ではありません。

私は子ども達が幼い頃からずっと一緒だった友達と離れ離れになってしまい、故郷を失ってしまったことをとても悲しく思います。

夫の事業も原発事故による環境汚染で継続が不可能になってしまったため、現在移転先を探しておりますが、もともと地域の自然環境に大きく依存した仕事だったため、なかなか代替地を見つけることができず、生活基盤を立て直すことはもとより、家族が揃った生活が出来ずにいます。

私はこのように多くの人々の生活を根底から無にするような環境汚染を引き起こした東京電力と、ひとたび事故が起これば、否、事故を起こさずとも放射性廃棄物を溜め続け、未来の世代にも大きな禍根を残すことになる原子力発電を国策として推進し、適切な監視、管理もせず、現在なお必要とされる対策をとらず、多くの人々を被曝させ続けている政府の責任者を厳重に処罰していただきたく、告訴いたします。

(M.Yさん)

私は以前に防災管理者の資格を取得しました。万が一防災管理者が管理していた施設から火災が起きた場合、防火管理者にも警察の捜査が入り、防火管理者が防火対策をしていたかを調べられます。そして、防火管理者が防火対策を怠っていた場合、防火管理者が出火に直接関与していなくても、逮捕されます。

防火管理の法律を考えても、福島第一原子力発電所を管理していた人達に警察の捜査が入らないのは考えられません。

以前から福島第一原子力発電所は危険が指摘されていたにも関わらず、稼働させ続けた管理者達には十分な過失があります。

それから SPEEDI の情報を公開せずに、誤った方向に住民を避難させ大量被曝の危険に晒した罪も非常に重いですし、福島県の放射線アドバイザーは原発事故まもなくから、安全であることを強調し過ぎ、福島県民を無用な被曝に晒した罪も非常に重く警察の捜査が入って当然であると思います。被告人達の犯罪行為について、捜査していただけますことを強くのぞみます。

(T.Dさん)